

大東亜戦争従軍記(1) 大東亜戦争への 準備演習

上原 雄 陸士49

編集委：本稿は、上原雄氏(陸士49)が25歳(1941年)の陸軍大尉で出征してから、30歳の陸軍中佐で帰国するまでの戦争体験記を、戦後生まれで戦争を知らない3人の息子さんと子孫に伝えんとして書かれたものです。

この度、次男で借行社家族会員である修氏より投稿いただいたので従軍記を何回かに分けて掲載する。

1回目は大東亜戦争直前に行われた演習について記載するが、淡々とした記述の中に、戦争を控えた緊張感が伝わってくる。

1 呂号特別演習(呂特演)

昭和16年3月15日、呂号特別演習参加を命ぜられた私は、高射砲第3聯隊・中隊長として演習中隊を編成した。

翌16日、私は輸送指揮官となり演習

大隊を指揮し字品に向かい、加古川駅を出発した。翌17日字品港到着、直ちに輸送船金華丸に輸送指揮官として乗船、門司港沖で船団を組み、一路、目的地上海に向かった。3月20日、黄海に入り米国船やソ連船の行き交う中、

早や黄浦江河口に至る。24日、連絡のため、初めて上海波止場に上陸したが、当時は治安悪く数日前、日本憲兵の暗殺事件があったので拳銃を携帯して、上海神社に参拝した。その後、虹口、

呉松路、北四川路を視察してからガーデンブリッジまで行き、自由港大上海の雰囲気に接した。その後、海軍と協同の船団訓練を実施して、3月31日、目的地の九州唐津湾に向かい出航した。

4月1日零時、作戦行動を開始。我が輸送船団は護衛艦隊の援護下、各船各個の防空に任じつつ、逐次唐津湾に進入、直ちに上陸を開始した。我が中隊は終日、船上に在って泊地防空に任じたが、敵機の来襲激しく射撃号令に声をからしてしまった。

3日夕刻揚陸作業を開始し夜半、最後の兵員を率いて、西唐津付近に上陸、翌4日未明、大隊の指揮下に入り、一路、大分方面に向かい前進し、夜は別府市に宿営した。4月5日、演習終了。約3週間にわたる演習中、無事故で終始したのは我が中隊のみであったのは幸運であった。

翌7日、佐世保重砲兵聯隊の営庭に於いて、竹田宮殿下臨臨(皇族の臨席のこと)の下、演習統監山田乙三大将より講評あり。此の演習は演習軍司令官今村均中将の統率による船団上陸演習であったが、その8カ月後に開始さ

れた南方作戦の予行演習だったとは、当時は全く思いも及ばぬことであつた。

2 関東軍特別大演習(関特演)

昭和16年7月8日、我が高射砲第3聯隊に動員下令あり。私は聯隊長より内地部隊の大隊長を希望するかと云われたので野戦を希望する旨答えたところ、11日に野戦部隊の命課があり、私は野戦高射砲第44大隊指揮班長を命ぜられたが、大隊長は兎角熱血漢でその点に注意して補佐するよう聯隊長から指示された。

次いで16日、姫路師団自動車徵發委員長を命ぜられたので、師団長に申告に行き、17日、自動車徵發業務実施のため、西宮市に至り、主として京阪神間に在籍の自家用乗用自動車数10台を検査場に集めて、検査を実施したが、定数充足後に遅れて持参したドイツ人若夫婦の新車は同盟国の誼で徵發を取り止めたところ、嬉々として帰って行ったのが印象的であった。なお、1台の徵發価格は15000円より50000円までであった。無事、徵發業務も終わ

り、いよいよ待望の野戦行きである。7月21日、各隊將校1名ずつを連れて、字品へ先行することとなり、23日、広島駅着。直ちに字品船舶輸送司令部に至り乗船の指示を受けたところ、広

進丸を指定されたので部隊の乗船命令を起案した。25日、約10時間半を要して搭載を終わり、20時出港、一路、大連に向かった。29日朝、私にとつて3年振りに大連に上陸、再び先発者3名を連れてその夜、大連発北上、翌30日夜半、ハルピン着。此処も満3年振りである。ソ連国境への軍隊輸送のため、民間列車の運転を制限している状態ではあったが、松花江やキタイスカヤ街には、依然白系ロシア人が多く異国情緒を呈していた。翌31日、ハルピン発、牡丹江に向かい、実に20時間を要して牡丹江に着き、直ちに第3軍司令部に行き、命令受領。その後、牡丹江の近郊、液河に展開して東部国境方面に対して防空任務に任じた。

10月1日、東部国境(東寧方面)で対空監視哨教育が行われ、約1週間に亘り、三角山哨所でソ連領のボルタフカやストロゴフカ方面を監視中、九七式砲隊鏡により約40000米以遠を飛行するソ連機「エスパー」中爆撃機18機や「イ16型」戦闘機の戦闘訓練を認めることができた。

牡丹江には私の伯父(赤鹿)の特に親しい同期生で私も幼時から親しくして頂いた第2飛行集団長寺本熊市中将(陸士28)もおられたので度々訪問してご夫妻の御厚情を得たことは幸いであった。

(続く)